（第三種郵便物認可）

島根の記憶 ⑧

松江・石橋町

欄干に街道の面影

写真右下の親柱に目を凝らすと、「石橋」と読める。親柱からは欄干が延び、どうやら橋の名残のようだ。これが、かつて職人町として栄えた松江市石橋町の命名の由来らしい。

「石橋」と読める親柱の立つ街道（若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供）

道路沿いにずらりと店の軒先が並ぶ。松江城をすぐ南に臨み、東西に走るこの街道は、城下町から美保関方面に向かう〈メーンストリート〉でもあった。

「質屋に大工、床屋、造り酒屋、お茶屋、げた屋、しょうゆ屋、左官屋、おけ屋、灰屋……。昔はにぎやかでしたがねえ、すっかり様変わりしてしまった」

往来を北に入った場所に住む城北地区町内会連合会長、綿貫勉さん(84)が、軒を連ねていた店の数々をそらんじた。

自宅は一九三一年（昭和六年）まで製糸工場を営んでいた。江戸時代に掘った井戸が近くにあり、タンク代わりに重ねた酒だるから、竹を四十―五十㍍つないで工場に送水し、まゆを煮た。ポンプアップして今も飲み水に使っている。「この辺りにはいい水脈が走ってますから、造り酒屋やしょうゆ屋さんなどがずいぶん栄えた」

街道のにぎわいが遠のくにつれ、下町は閑静な住宅街へ。石橋の姿も変わっていった。地元の人たちの話では、元々、奥谷川に石でふたをした橋で、南北にひざの高さほどの欄干と親柱があったが、道路整備と同川の暗きょ化で南側の欄干と親柱の土台を残すのみに。柱の行方は知れない。

片側に残る低い欄干と土台が面影を伝える

近くの舟越徳男さん(74)は「川はもっと広く、深くて、子供のころはフナが泳いでいた。その昔は、船が米を運んでいたそうです」と振り返る。

石橋のあった場所から路地を入った先にも、井戸と地蔵のほこらがある。住人らが大切にまつり、水脈の恵みも枯れないでいる。